

前澤工業(宮川多止社長)は5日、川口市内の本社で恒例の年頭あいさつを行い、社員らを前に新年の抱負を語った。リモート会議システムも活用したほか、本社内でもフロアごとに聴講会場を分けるなど、新型コロナウイルス感染症対策を講じて実施した。

宮川社長は、コロナ禍に出口が見えてきた一方で、需給ミスマッチによる経済停滞、地球規模での気候変動対策としてカーボンニュートラルに注目が集まっていることなどに触れ、昨年1年間を振り返った。新年の見通しとしては、「世界経済が脱炭素を中心とする新たな課題に取り組みつつ、コロナ禍前に直面して



宮川社長

## 「新たな成長の基礎固める1年に」

### 前澤工業 宮川社長が語る新年の抱負

いた経済の長期停滞を脱却できるかが問われる重要な時期になる」と強調した。

依然として混乱を極める

社会情勢において、前澤工業グループの存在意義(パーパス)を考え、中長期戦略へと反映していく考えを示した上で、昨年8月の社長就任時に掲げた注力施策2点(技術開発の強化・社員一人ひとりの個性が活かされる企業組織にも言及。

後者については「持続的な成長の実現には生産性向上が不可欠。当社グループでもDXに関するプロジェクトを立ち上げて検討を進めているが、継続的な生産性向上につなげるには、新たな技術を使いこなせる人材の育成や旧来の業務プロセス再編といった人に頼る部分が大きい。人材を活かす具体的なアクションとして、まずは社員一人ひとりのキャリア形成支援を充実

させた。節目ごとに自分を見つめ、1年後、5年後、さらにその先の自分像をぜひ考えてほしい」と呼びかけた。特にシニア層については「自らが有する知識、経験を活かした後継者の育成や、中堅社員の負担を軽減しバックアップ体制を敷く、あるいは専門性を活かして業績に貢献するなどの役割を期待している」と寄せた。社員教育・研修の充実などを通じ、若手社員のキャリア形成支援に取り組む考えも示した。

最後に「今年の干支である壬寅(みずのえとら)は、『厳しい冬を越え芽が吹き始める、新しい成長の礎になる』というイメージ。世の中が目まぐるしく変化する中、中期3カ年計画の2年目を迎え、将来の前澤に向け、新たな成長の礎をしっかりと固める1年とした」と力強く語った。